

# アメリカと宗教

ピューリタニズムからカルトまで

有賀 弘

## 1 はじめに

アメリカの宗教について乱暴な話しかできそうなのです。ですが、タイトルは「アメリカと宗教」としました。それは「アメリカの宗教」というつもりではないという、アメリカの宗教について説明的にやるというよりは、むしろ、もう常識的な問題だと思いますけれども、アメリカの宗教というのは、少なくとも十九世紀までは基本的には全部ヨーロッパ・オリジンのものでして、しかもヨーロッパにおける展開とは非常に異なった展開をして

いるわけで、それを一応整合的に説明することができないだろうかというのが今日の関心の対象です。副題を「ピューリタニズムからカルトまで」としてありますけれども、これは話題の中心はピューリタニズムとリヴィア・イヴ・アリズムとファンダメンタリズムとカルト、ただしカルトについてはほとんど触れておりません。たった一言で説明は終わりという形になっています。

これも弁明みたいになってしまいますが、アメリカの宗教の問題を考えると概念がみんなあいまいなのです。たとえば、ピューリタニズムとは何だというの人は人

によってみんな違うくらいに、ピューリタニズムの定義というのにははつきりしていないわけです。それから、リヴィア・イヴ・アリズムといつてもファンダメンタリズムといつても、定義的に限定することは非常に難しいし、ましてやカルトという話になれば、千差万別のカルトがいっぱい存在する。けれども、そういうものをひつくるめて考えてみて、一貫性を持つた説明というのが可能なら、それを試みてみたいと考えたわけです。ただし、結果的には一貫性を持つた説明にはなっていないと思いますけれども、問題関心はそういうことです。

いずれにしろそういうことを考えていますと、アメリカの宗教というのは、宗教というかたちでヨーロッパ諸国と同じようにくくなってしまうことはできない。むしろ、社会そのものが宗教的性格をもつてているのではないかという感じが、だんだんしてくるわけです。それでは、アメリカとは宗教的・社会かという話になると、かならずしもそうとも言えない。そもそも宗教的・社会という言葉そのものも、どう定義して良いのか困ってしまう。アメリカの場合、宗教性が表立っていることは確かですが、ヨー

ロッパの場合ですと、だんだん内面化が進行して、宗教というのは社会の表面から姿を消すといったらおかしいですけれども、たとえば教会としては残っている、そこへ礼拝にいく人たちはいる、けれども宗教が社会の性格規定みたいな役割を果たしている側面はだんだんなくなつてきてているというふうに思うのですが、アメリカの場合にはその点が違うのではないかという感じがかなりあります。

つぎに、「アメリカ社会の宗教性・非宗教性」ということで考えてみますと、たとえばマックス・ヴェーバーの論文で非常に有名になった、それ以前から有名だったと思いませんが、ベンジャミン・フランクリン、自伝を読みなおしてみたのですが非常におもしろいのです。非常に面白いというのはなにかといいますと、彼はマサチューセッツのボストンで、まさにニューイングランドのピューリタニズムの真っ只中で生まれるわけです。けれどもそこから抜け出してしまって、ニューヨークへ行つてしまつて、ボストンにいる間もそうですが、ニューヨークへ行つてからも教会へはほとんど出席しないので

す。教会関係の慈善事業とかには金は出しているのですが、教会にはつまらないといって出席しないのです。

されでは非宗教的な人間がある人は信仰をもっていないのかということになると、敬虔さにおいては、しかも内面的敬虔さというよりは社会的に表現される敬虔さにおいては、他の人から際立つぐらい、とりわけ彼の出身階層から考えれば非常に際立つような敬虔さというのをもっている。教会にはほとんど行かないのですが、リヴァイヴァリズムの論文を読むと、それをサポートするためにかなりの大金をだすというようなことをやっているわけです。

そうすると、こういう人の宗教性というのは一体なんなのだろう。考え方によつては、たとえば教会に忠実に通つてというのが敬虔さと宗教性の証明であるとすれば、フランクリンの生活というのは非宗教的生活となり際立つている。そういう意味では、宗教性をもつた人間です。マックス・ヴェーバーがああいうかたちで取り上げるのは、理由があると考へていいくらいの宗教性は

もつてゐるといふふうに思うのです。

ただ、フランクリンをピューリタンといふふうに考へてもいいのかどうか、こうなると本当に困つてしまつて、どうもピューリタンという定義づけをするのは難しいのではないかという気もしますけれども、他方では、やはりピューリタンだとと思わざるをえない。それはそれとして、フランクリンというのは、そういう意味では特殊なかもしませんけれども、だけど考えてみると、アメリカのかなり一般的な人々の際立つたタイプ、人物だったということではないかという気もするわけです。

マックス・ヴェーバーのついでにもうひとつ問題にしたいのは、彼の見た「世俗化された」宗教性ということです。それは、『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』の問題ではありませんで、『プロ倫』の場合には「世俗化された」という側面についての記述はあまり無いのですけれども、これはセクト論文といわれているアメリカ観察記の問題です。要するにマックス・ヴェーバーの従兄かなにかがアメリカへ移住して耳鼻科を開業するのです。そこへ患者がやってきて、「わたしは

××通りのバプティスト教会の会員です」と言うわけですが、ドイツから行って開業した従兄は何のことかわからぬでいたら、後からアメリカ人の医者が「治療費は確実に支払いますからご安心を」という意味だという説明をしてくれたという話しがセクト論文に出てくるのですすけれども、これは宗教は単なる手段ないし飾りであつて、したがつてそういう人には宗教性はないのかという話しなれば、そうではないと思うのです。やはりある種の宗教性を備えていて、おそらくかなり敬虔なクリスチヤンです。その後に洗礼を受ける話しが出てきますけれども、バプティストなので全身洗礼で、やはり洗礼を受けるために全身を水に浸してというのはある種の敬虔な宗教性といわざるをえない。だけど、それが同時に金の支払いは確実ですといふような世俗レベルの問題と完全に結びついてしまう。そういう意味では、考へようによつては宗教がその時々の社会にどんどん適応して変化していくといふにも考へられるのかもしない。けれども、その点もどう解釈していいのか考へるのはよくわからないということです。

十九世紀は、宗教社会的であったということは事実だと思います。それが一〇%ぐらいで、二十世紀になつ

てからそれだけ上がっているとすれば、その宗教性といふのは全然落ちていない。十九世紀の場合に所属率が低いというのは、これは西部へ展開していくときには教会に登録するという状況ではないわけですから、必然的に低くならざるをえないということなのですが、それが二十世紀になつてそういうことが可能になつたら、これだけの数字になつてしまふというのはたいへんなことだろうと思うのです。そういう意味では、宗教的社會というふうにいえると思うのですが、これはヨーロッパではおよそ考えられないことだとすれば、全部ヨーロッパ・オリジンの宗教であるものが、アメリカにおいてはそういうふうたちで社会生活のなかにちゃんと根づいたままで現代にまで残っているというのは一体どういうことなのか、そのところを一貫した説明が可能なのか、そのようなことをちょっとと考えてみたいということです。

2 ピューリタニズムの変容

一貫した説明といういふ方をすれば、当然のことながら、そういうことを考へるためにはやはり歴史にたち戻

るわけです。だけど、セバラティストはピューリタンでないと考えるとすると、アメリカの場合には、たとえば最初にプリマスへ行つた聖徒たちというのは、基本的にブラウニストです。そして、ブラウン派の人たちは完全にセバラティストです。

いわれるわけです。そして、その文脈上では、アーヴィングの「植民地の建設」ということが、またピルグリム・ファー・ザーズというものが非常に重要視されるということにならうわけです。

ブラウンというのは変な人で、みんなを分離させておいて自分を中心、「聖徒の共同体」としての教会を作ったのですが、自分はさっさと再転向して国教会の牧師に戻ってしまうのですが、コングリゲーシヨナリズムの父と呼ばれるように、会衆派的な方向というのはブラウンによって提出された方向ということができますし、そういう意味ではブリマス植民地というのは、ある定義によればピューリタンと関係ないのです。教会の純化という発想とは全然違つて、「聖徒の共同体」を作っていくといふうにことわらざるをえないのですけれども、何しろそういうものがピューリタニズムと呼ばれ、そしてそのピューリタニズムを精神的中核とした独立自営農民による社会建設というのが、アメリカ史の原点みたいに

いわれるわけです。そして、その文脈上では、フレーバー植民地の建設ということが、またピルグリム・ファー ザーズというものが非常に重要視されるということになります。

ところで、「メイフラワー誓約」(Mayflower Compact) というのは、教会形成のための誓約 (Covenant) とは全然違うのです。一応ピューリタンとしておきますが、ピューリタンでない人たちがメイフラワー号にはたくさん乗っていて、そういう人たちを取り込んだかたちで植民地を運営していく、そういう意味では、植民地に政治的に統合していくことが上陸に先立つた大問題なのでしょうが、事実船の上でいろいろなことがあるのです。

ピューリタンのほうが、女・子供連れで年を取つていて労働力としては駄目で、だからピューリタンでない人々は、あんなものは放り出して自分たちだけでやろうと、いうほうが、よほど植民地開拓には良いという意見が強くなるわけです。上陸して一冬越したら半分くらい死んでいたわけですから、へん厳しい状況で、そこで放り出されたらピューリタンたちは全滅して、彼らだけが生

つて考えてみる以外に手はないわけです。そうなればアメリカ史の常識にたち戻って、ピューリタニズムを精神的中核とした独立自営農民の作り出していく社会といいうイメージをもう一度問題にしてみざるをえないというところで、ピューリタニズムというのはいつたい何だったのかという問題から始めたいと考えます。

き残るということになりかねない状況だったわけです。

だから、いわば政治的・社会を構成するために、教会契約ではなくて世俗的・契約を結ぶというかたちでマイフラー・コンパクト、言葉も違うわけです。教会契約はコンパクトです。コンパクトのほうは世俗的・契約なのです。そういう色彩が強いのです。マイフラー・コンパクト

によって形成された共同体というのは、基本的には政治的な目的を持つていた。あるいは、政治的統合を目的として、宗教というのは副次的な要素に拡散されてしまつて、にもかかわらず、もちろんピューリタンの人たちにとっては宗教の問題は非常に大きかつたわけです。

ですから、いつたんそういう契約を結んで以降は、なんとかして非ピューリタンを取り込んでいくような体制、取り込んでというのは政治的に取り込むという意味だけではなくて、宗教の側面でも取り込んでいくような体制をつくろうと、一生懸命努力するわけです。プリマスの場合にも、そういう努力はコンングリゲーションナリズムにもどづく一種の公定教会制として行なわれるわけですがれども、そう簡単にできるわけではないわけで、先

ほど申し上げたようにむしろ現実の力としては非ピューリタンのほうがはるかに力を持っていたとすれば、いくら努力しても公定教会制を貫徹するということはできない。したがって、わりあい簡単にプリマス植民地というのは崩壊して、マサチューセッツ湾植民地に併合されるということになるわけです。

しかし、この過程はプリマス植民地をアメリカ史の原型としているといえると思います。原型という言葉は斎藤眞先生が割合こだわって使っているらしい言葉なのですが、ピューリタンだったから原型なのではなくて、ピューリタンを中心にしていったかも知れなけれども、まさに政治的な、あるいは統合の問題を頭において植民地を形成していくをえないという意味で、その後のいろいろなレベルでのアメリカの宗教と政治の関わりについての原型としての意味を持つのではないかとうふうに考えるわけです。そういう観点から他の植民地を見てみると、それぞれにそういう側面がつよく見えてくるのではないかという気がいたします。

プリマスの次に問題になるのはマサチューセッツ湾植民

地とそこにおける公定教会制かと思いますが、この問題については前に佐々木さんがご報告くださったのでいろいろ申し上げることはなにもないかと思います。簡単にいえば、神権政治的な体制といえるものをつくろうとしてそれがあまりうまくいかないで、それを一種の国教会制としての公定教会制へと切り替えていこうとするのが

マサチューセッツの例ではないか。ですけど、その原点になるのはピューリタニズムなんですね。ジュネーブにおけるカルヴァンのよくな、一種の神権政治の体制といいうのは矛盾は含まないと思います。だけど、どんなに広義に使つてもピューリタンというのは、それぞれの信仰における一致を前提に集まつていて、そこに教会を形成するという、教会内ピューリタンの場合もそういう側面が非常に強いと思いませんけれども、教会をつくらないとしても集団をつくる。集団形成の原理はそういうもので、セパラティストの場合は完全にそうです。それは、アメリカにわたつた人たちの間にかなりはつきり見られる傾向でいえば、「聖徒の共同体」としての教会をつくるという傾向、それがピューリタン一般の傾向というふうに

考えられるとすれば、神権政治もやるわけですが公定教会制というかたちで一応制度的定着がはかられるとすれば、それは本来の自分たちの信仰としてのピューリタニズムと矛盾せざるをえないわけです。

具体的には、タウンの共同体を前提にして、タウンの運営に携わる公民と訳されたり市民と訳されたりしますけれども、タウン自治でタウンの公民権をマサチューセッツの公定教会制を支えている信仰の担い手に限定するというかたちで、公定教会制的な方向といいうのは取られていくわけですけれども、これは移民がある程度流入してくれるがすぐ崩壊せざるをえないわけです。新しく入ってきた人をそういう共同体に取り込んでいくような、そういうエネルギーを生み出せるようなものでは全然ないわけです。それはピューリタニズムと国教会制の矛盾というものがそういうところで露呈してしまうということだろうと思いますけれども、結局は、わりあい早い時期から実質的には寛容政策を取らざるをえないということになつていったのだと思います。

ペンシルヴェニアとロードアイランドというのは、変

ない方をするとマサチューセッツからはみ出した部分で、ご存じのとおり、ペンシルヴェニアはウイリアム・ペンがクエイカーの社会をつくるのですが、そこへいろいろな要素が流れこむわけです。そもそもクエイカーというのは、マサチューセッツからして、そういうはみだしの要素が集まっているわけです。だから宗教についていえば、はじめから寛容政策です。寛容政策の下で、植民地としてははじめから政治的に統合をはかるということが前提です。

これは現地にいつてみてびっくりしたのですが、再洗礼派のメノナイトがランカスターの、フィラデルフィアからだいぶ内陸に入ったところに最初の根拠地を築いて、アーミッシュというのはそこから分かれたわけです。アーミッシュというのは、メノナイトに対するファンダメンタリストという立場を占めると思いませんけれども、メノナイトが来たのは、実はウイリアム・ペンが手紙を書いて「そんなにヨーロッパで苦労しているのなら、土地の余裕はあるからこっちへ来たらどうだ」。その点、ウイリアム・ペン自身はかなり真摯なクエイカーだと思

いますけれども、クエイカーだけでという閉鎖眼的な視座に閉じこもつてゐるわけでは全然ないのですね、そのことが証明してゐるのは。そういう意味では、はじめから寛容政策になつてゐるわけです。

ロードアイランドについても同じです。これは、ロジャー・ウイリアムズが中心になつて植民地がつくられたのですが、ロジャー・ウイリアムズというのはマサチューセッツの異端者で、マサチューセッツを追わされてわりあい放浪するのですが、プロヴィデンスに本拠地をつくります。これも最初から宗教的寛容が前提でことは進行するわけです。ペンシルヴェニアとロードアイランドといふのは、将来においてプリマスやマサチューセッツで起こるであろうことを先取りしたようなかたちで、植民地建設が行なわれるということになったわけです。

ですから、はじめから寛容が前提だということになれば、少なくともそういう世界においては、宗派間の教義的な差異というのは、あるいは差異が持つてゐる意味というものは相対的に小さくなつてしまふ、ならざるをえないわけです。意味が小さくなつていくということは、

実は教義の差異も小さくなつていくということです。教義の差異というのをどういうふうに見るかは問題ですけれども、要するに「俺のところはこうなんだ」としがみついているから差異は大きいように見えるわけで、実際の差異というのはそんなにないわけです。たとえばピューリタン諸派についてみれば、少なくとも分離派といふのは、プラウニズムの場合は完全にそうだと思ひますけれども、いつたん分離をはじめたら無限の分離の可能性を持つています。それは小さな差異でみんな分離していく可能性を持つてゐるわけです。そういう小さな差異で分離していったのが共存という話になつてくれば、気がついてみれば差は大きくなかつたではないかという意味で、実質的にも差異は減少してしまふという側面を持つています。だけど、そうなりますと宗派の存在理由がなくなりますから、実質的には差異は減少したとしても、違うんだということは主張される。しかし、あまり実質的な意味をもたないようなかたちで差異は主張されるという状態が、まさに最初から寛容政策をとることによつてペンシルヴェニアとロードアイランドでは実現し

ていったのではないかというふうに思います。最初から寛容政策ですから、どんどんますます異質な要素が流入してくるのです。そして、流入してくる中で、実質的な異質性というのはどんどん縮小していつてしまうということではないかと思います。

さらに、十八世紀のこのよだんな状況は、十九世紀のデノミネーションナリズムの原型をなしたのではないかと思ひます。デノミネーションナリズムという概念は、これまたかなりあいまいで、あまりいい概念という気がしないのですが、その概念が適用される状況というのは、おそらく十九世紀の中葉以降ぐらいから、アメリカにいろんな宗派がいっぱいあり、それが併存状態でそれぞれに違ひを主張しながら、実質的な違いはあまりない。そういう状況に巻き込まれて、たとえばカトリックもひとつのデノミネーションになつてしまふし、ユダヤ教さえもひとつの中葉になつてしまふし、ユダヤ教もひとつのデノミネーションになつてしまふということで、これは宗教統計の本を見ますと、しばしばカトリックもユダヤ教もプロテスタント諸派と一緒に並べられているのです。バプティスト以下の諸宗派と一緒に並べられて

いるというような状況が出てくるのですが、そういう状態が生まれてくる原型的な状況というものが、ペンシルベニアとロードアイランドにはあつたのではないかということです。

### 3 諸宗派のアメリカ化

十八世紀の中ごろまでの状況で考えれば、以上の三つのタイプというのはそれに原型性をもつてゐるといふに考えられますが、それと並べてもう少し宗派の問題を考えるとすれば、最初のイギリス植民地ヴァージニアはイギリス国教会を持ち込んだわけです。それでイギリス国教会の忠実な制度化をはかるうとしたわけで、教区制、そして大問題なのですが、教会税——十分の一税ですが、十分の一税というものは収入の十分の一で相当な重税だと思います——いずれにしろ教区制度を整備して教会税を徴収して、その基礎のうえに国教会をなるべくイギリス国王との関係のなかに閉じこめようとするのです。

けれども、国王は海の彼方のわけです。そういう意味

れども、厳然とした国教会制度をとつていたのが、独立の気運が増大する中で、寛容というよりは宗教的自由、信教の自由の要求が強く出されるようになり、他の諸植民地にさきがけて、「ヴァージニア宗教自由法」というかたちでの、信教の自由を保障する法制度が真っ先につくられるという、国教会制をとつていたがゆえにかえつてそういうことになつてしまふといふにいえるかもしれません

れないと私は思います。

それからもうひとつ、さつきカトリックのことをちょっと申し上げましたけれども、宗派といつていいのかどうか知りませんが、カトリックというのはどうなつたのかといふことも問題にならざるをえない。マリアーランドというのは最初からカトリックです。ボルティモア卿に後押しされたカトリックがメアリー・ランドに導入されるわけですが、これは最初から少数派でした、イギリス本国でもこの時期になれば少数派なのです。だから、いわば差別を受けているほうの少数派が小さな根拠地をアメリカに求めてということでやつてきたわけで、したがつて、ここではペンシルベニアやロードアイラ

では国王不在なのです。ですから、首長不在の国教会といふ変わったものにならざるをえないわけです。国教会が建前で教区制をひいてということになると、ヴァージニアがまずとるのは不寛容政策です。要するに、国教会の不寛容という形で宗教的要求を押さえ付けようとする方策だと思います。しかし、国王不在の国教会といふ体制がとられてることによって、政治的な要求といふのは割合ストレートに教会の問題として表に出でてしまうわけです。さらに、下層のところからの政治的な要求といふのは、聖職者などとは無関係に飛び出していくということになつてくるのだと思うのです。だから、国教会は政治的統合のための道具としての役割を果たしえなくなる。

したがつて、たとえば独立ないし革命が具体的な日程に上がるようになると、国教会ではもたないということになるわけです。ヴァージニアは、独立革命のリーダーたちをたくさん生み出しているのですけれども、彼らにとつても国教会といふのは矛盾として写らざるをえなくなつてくるわけです。十八世紀もかなり進んでからでけ

ンドと同じようにはじめから宗教的には寛容政策がとられたのです。

そういう意味ではカトリックはあまり大きな意味をもたないままいるわけですけれども、そこへ十九世紀になつてアイルランドからの移民が、これは必ずしもメアリー・ランドへという意味ではありませんが、大量に流入してくるという事態になるわけです。その時に初めて、カトリックの問題といふのは具体的な問題になるといえます。十九世紀前半、アイルランドではずっと飢饉が続き、一〇〇万人近く人々が移民として流出したのではないかと推測されていますが、その圧倒的的部分はアメリカへ行つたわけです。そしてアイルランドは、現在まで尾を引いているように、基本的にはカトリックの支配的な地域です。とくに飢饉にさらされる人たちといふのは、元々のアイルランドの住人でイングランドから行つた人たちではないわけですから、土着に近いカトリックをそのまま持ち込むということになるわけです。ですけれども、アメリカ社会では相対的な少数派などといふ段階にはとどまらないわけで、周辺は圧倒的にプロテ

スタントの中へ、一握りのカトリック教徒というかたちで、アメリカ社会に入つていくわけです。

もともとアイルランドにいた時からそうだと思いますけれども、彼らは敬虔なカトリック教徒ですが、ローマ教会との関係というのはある程度希薄なのです。イングランドとの関係もあって、彼らはローマから相対的な独立性を保つてゐるわけですが、それが大西洋を渡つてきた、そういうカトリック教会。たとえば南米のカトリック教会に対してはローマは非常に直轄的に布教しているのですが、アイルランドのカトリックというのは、古代ローマ帝国にイングランドが所属してい頃からカトリック化されてゐるわけで、そういう意味では近代になつてローマ教会が直接手を下したような対象ではないわけで、相対的に離れた関係にあつたわけです。

それは聖職叙任の問題についても影響を及ぼしていまして、ローマはちゃんと面倒をみてくれないし、ローマの面倒はみてももらいたくないアイルランドのカトリックということになると、聖職者が絶対的に不足してしまつたのです。カトリックの場合に聖職者がないといふの

とははなはだ困ることだらうと思いますけれども、極端に不足してしまつたのです。その結果、高位の聖職者までが選挙によつて選ばれるという制度が、アメリカでは十九世紀の割合早い時期に定着してしまつたわけです。もちろん、聖職者選任の問題は現代では異なると思いますが、当時のカトリックというのはアメリカ流のひとつの宗派、そういう意味ではカトリックは完全にアメリカ化してしまつたといえると思います。

イギリス国教会についても、ヴァジニア宗教自由法みたいな、イギリス本土における寛容令の問題とは全然違うような観点がだされてくるということは、アメリカ化したということだろうと思いますし、ほとんど同じような問題はユダヤ教についてもいえるのではないか。要するに、諸宗派の中ではバプティストがいちばん多数派なのですが、バプティストからエダヤ教まで含めて、諸宗派はすべてアメリカ的な宗教になつていつたのではない。そういうアメリカ化、その結果がデノミニネーションナリズムだと思いますが、そのデノミニネーションナリズムへの方向を宗教的に支えていたのはリヴィア・アリズムと

いうふうに思います。

#### 4 リヴィア・アリズムとデノミニネーションナリズム

このリヴィア・アリズムというのも広義です。頭に浮かんでゐるのは大覚醒といわれるものでジョナサン・エドワーズがいちばん有名ですが、現代のビリー・グラハムになれば信仰の内容などはほとんど無関係なのです。戦後のわりあい早い時期のビリー・グラハムの伝道集会を聞きにいったことがあります、要するに「回心したと言え」というだけの話しながらです。それを鳴り物入りでやつて、まわりでみんな自分は回心したという感じで、それにつられてわーっと回心熱が起つてしまつのです。そういうのをみんな取り込んでしまう。ビリー・グラハムというのは、もともとはバプティスト系ですけれどもどの宗派へ行つてもいいんですね。そこで回心したという人たちを、たとえば住んでいるところの便利さとかそういう種類のこと、いろんな宗派の教会に適当に分け与えてしまうのです。そういう意味では、極限化し

たデノミニネーションナリズムの状況というふうにいえると思いませんけれども、ビリー・グラハムは非常に極端で、それをジョナサン・エドワーズと比較したら、これはほとんどない話だと思います。エドワーズの大覚醒運動の主要な関心は、「聖徒の共同体」の再興。アメリカへ渡つてきたときの、これもアメリカ的ピューリタニズムと思いませんけれども、ピューリタニズムの精神の再興というのが、エドワーズのめざしたところだといえます。アメリカ・ピューリタニズムの原点に戻つての聖徒の共同体の再興というのをめざすのでしょうが、それは結果的には非常に政治的な効果を生むのだと思います。

「聖徒の共同体」をアメリカに再興するということは、それを政治に読みかえれば、結局はイギリスから独立した共同体の形成であり、革命であるという、そういう連関を本当はちゃんと文献的に証明しなければいけないと思いますが、明らかにそういう関連をもつたかたちで独立や革命の意識を鼓吹する結果になつてゐる。そういう意味では、初期のリヴィア・アリズムというのも政治的要因が優位しているといつていいと思います。だから、

そういう側面のうえでリヴァイヴァリズムというのはずっと展開することになるわけで、十九世紀のリヴァイヴァリズムも、これはフイネイとかそういうところから始まって十九世紀末までをいちおう思い浮べているわけで、これをみますとさきほどの大覚醒が世俗化して、世俗といつていいのかあるいは内面性の欠如といつていのいか、その辺が困ってしまうのですが、その路線のうえついにはビリー・グラハムにいたるような方向でずっと展開していくわけです。

フイネイというのはたしかオバリンの総長になるのですが、オバリンというのは神学大学としてもともとつくれたところです。そこの総長になるということですが、グラハムのような話しではおよそないのですが、エドワーズから比べればそういう方向へかなりむかっていくし、その後の人たちというのはどんどんそういう傾向をたどっていく。それはユニテリアン、あるいはアルミニウス派、いつてしまえば自由思想論が深く浸透していく、教義的に考えればそういう問題だと思います。

マックス・ヴェーバーがあの「プロテスタンティズム

バプティストおよびメソジストは、バプティストがいぢばん中心ですけれども、そういう宗教を前提にして黒人層に急速に浸透していくわけです。それでアメリカ最大の宗派、バプティストはとび抜けて大きいのですが、そういう宗派を形成していくことになるわけです。これは、極端な言い方をすれば現状生活の全面的肯定で、それがもつていている作用というのは、黒人層の場合で考えれば、かなり保守的な機能といえると思いますが、そういうかたちで浸透していくわけです。

リヴァイヴァリズムに戻れば、それは宗派を超えた大集会になるし、そういう宗派を超えた大集会をベースに、自由思想論を基礎にしたような各宗派が社会の下層に急速に浸透していく、それが十九世紀のリヴァイヴァリズムの特徴ではないかというふうに思います。それは、デノミネーショナリズムの問題として一応コメントを加えるとすれば、宗派を超えた信仰心、宗派と信仰心との直接的な関連性というのはほとんど消えてしまって、ただリヴァイヴァリズムによって信仰心を高揚させて、それをベースに各宗派というのは平和的共存というのも適當

の倫理と資本主義の精神』を書いたとき、やはり中心的なテーマのひとつはカルヴァンの予定説であるわけで、この予定説というのは自由意思の完全否定ですね。これは、エラスムスとルターの論争でもお分りのとおりで、自由思想論の完全否定、そこをヴェーバーは重視しているのですけれども、カルヴァン派的なユーリタニズムのなかにも、その自由思想論が圧倒的に浸透していく。それは別の言い方をすれば、日常生活における理性、理性的判断、そういう意味では政治的といいますか日常生活といいますか、社会的といつてもいいかも知れませんが、そういうものが圧倒的に優位した信仰というものです。だから「回心」というような場合にも、それは回心したということを中心とした回心なので、内面での宗教的体験の問題ではなくなってしまいます。パウロにおける、あるいはルターにおけるというようななかたちで問題になるような回心の問題では全然なくなってしまう。初期のピューリタンの場合にはその問題は大きかつたはずでけれども、全然違ってしまうということになると思います。

信仰心あつき社会においては、信仰はまさに社会的なものをベースに成り立つて、そこには社会に浸透しやすい。そこにでき上がりてくる社会において、少なくとも表面的にはますます信仰心・宗教性が強調されるのであります。そうした中で各宗派の平和的共存が成り立つていくという状況、これが十九世紀末までに達成されたアメリカ社会の基本的なトレンドではないだろうかと思います。それはもうちょっと別な言い方をすれば、宗教というものはアメリカにおいては異常に政治的、括弧つきですが、政治的役割を強く担わざるをえなかつた。何しろインディアンを除けば無人の荒野に國をつくっていくわけですから、どうしてもボリティカルな性格の宗教が必要とされた。

しかし、南北戦争も終わって、政治的な枠組みが確固としたものになつてくるのと並行して、宗教は社会道德的な、あるいは倫理的な側面ばかりが強調されるものへと転換していくのであり、その延長線上に海外伝道への

情熱もある。アメリカ社会はそういう意味での宗教的社會になってしまった。そして、比喩的にいえば、フロンティアの消滅は、政治的には太平洋の彼方へ向かっての進出を、また宗教的には、これも主として太平洋の彼方に向かっての海外伝道を生み出した。十九世紀の後半からだんだん海外伝道の情熱が高まつてくるのですが、アメリカ社会に内在すれば、そういうことも関係をもつているのではないかということです。

社会道德的な倫理的な宗教というのは、社会の上層の人びとにとつてみれば、教会に出席するということだけでは満足できないで、より積極的に教会活動に参加していこうとする情熱を生む。そうすると教会は俗人化するわけです。そうした方向での代表的な運動は社会的福音（ソーシャル・ゴスペル）だらうと思いますが、要するに大衆を道徳的・倫理的に鍛えていこうとする。そのためにはまず必要なのは健全な生活を支えてやることで、一種の福祉的な活動が教会活動の中心になる。あるいはクリスチヤン・サイエンスのような方向。そのいきつくところは禁酒法です。禁酒法が成立する近代社会というのには、

場合には、そういう意味では教会が社会福祉活動の中心的な担い手になることはないのです。教会というのは、国教会制的なものが強かつたところでは、いわばパブリックな行為として社会福祉活動が行なわれているとすれば、アメリカの場合には基本的にプライベートな、したがつて社会福祉というふうにはおそらく言葉を使えないような慈善活動的側面が、禁酒法を成立させるのも一種の慈善活動なのですね、そういう側面が強いということになるのではないかと思います。

いままで申し上げたような性格——デノミネーションナリズム的な社会、そういう意味で宗教性の非常に強い社会というのがアメリカ社会であるとすれば、その社会にファンダメンタリズムが（ファンダメンタリズムというのも困ってしまうのですが、何がファンダメンタリズムか定義のしようがないのですが）出てくる。たとえば、典型的にはモルモンだとからの塔とかを考えるとすれば、そういう集団が、要するに宗教的共同体を、しかも大きな規模で実現していこうとする。共同体、あるいは社会を形成する契機としては宗教の意味はほとんど失われてしま

イスラム社会は別にして、なんと表現していいのかわからないのですが、道徳的・倫理的・社会といつても手はないのかなと思うのですけれども、そういう方向といふのが教会内で、とりわけ豊かな階層のなかではそれがどんどん進行していく。そういう活動をすることによって、いわば自己満足していくという傾向があると思うのです。

これはソーシャル・ダーヴィニズムの問題も大きいと思いますが、貧困な労働者大衆への対応がほとんど社会主义には転換していかないのでしょう。一部は社会主義にいきますけれども、そうではなくて社会的福音のようないくつかの方向へといふになつていく。そういうかたちで社会の宗教性といふのは維持されていくということかと思うのです。ただし、教会が社会福祉活動の中心的担当手となることはない、その点はヨーロッパとの大きな相違だらうと思います。これは二十世紀もかなり進んでからの問題かもしれません、ヨーロッパの、国教会制的側面が強かつた社会においては、福祉国家化の中心的な担い手のひとつは教会なのです。しかしアメリカの

つて、ただ社会全体には宗教性があふれているようなアメリカ社会のなかで、宗教的共同体を形成していこうとするファンダメンタリズム的な傾向というものが起つてくるのは、ある意味では当然のことではないのでしょうか。

だけど、これが多数派になることは絶対にありえないわけです。ある程度の勢力にとどまらざるをえないのですけれども、それは別の側面からみますと、デノミネーションナリズムの展開、そしてそういうかたちでの宗教的社会としてのアメリカ社会の宗教的性格が強まつていくということは、宗教の問題といふか信仰の問題としてみると、信仰の内面化という契機、これは大陸の場合だと十七世紀の末から十八世紀になれば非常に大きな問題になる、そのことによってヨーロッパ社会の宗教的性格はだんだん弱まつてくるのだと思いませんけれども、そういう内面化の契機といふのは、アメリカにはほとんど登場しない。そのこととファンダメンタリズムといふのは、もうひとつアメリカで登場しないのは、神秘主義だろ

うと思います。今まで申し上げたようなことであるとすれば、神秘主義が登場する契機というのではないわけです。カルトというのは、ある意味では、そういう神秘主義的な傾向の欠如していることに対するリアクションという側面もあるのかなという気もしますけれども、証明のしようはないのです。ただ、総括的にカルトというものを考えることはできないはずですけれども、それをあえて一言でくくつてしまえば、カルトというのは、大衆社会化状況の下でアメリカ植民地の初期の形成段階で問題になつたような「聖徒の共同体」を作り出していこうとすること、というふうに一言でまとめてしまつてもそれは不當ではないかもしけないというふうに考えています。

(あるがひろし・東京大学名誉教授)